

## 後期：現代キリスト教思想研究2——現代あるいはポストモダン

オリエンテーション+研究発表

1. 解釈学的神学と現代思想
2. 政治神学1——シュミットとモルトマン
3. 解放の神学1——フェミニスト神学1 10/24
4. 解放の神学2——フェミニスト神学2 10/31
5. 政治神学2——アガンベン 11/7
6. 政治神学3——ジジェク 11/14
7. 研究発表 11/21
8. 研究発表 11/28
9. 研究発表 12/5（予備：1/9）
10. 解放の神学3——黒人神学 12/12
11. 解放の神学4——アジア 12/19 12/26は休講（東京出張）
12. 宗教の神学とヒック 1/16
13. エコロジーの神学 1/23

## &lt;前回&gt;政治神学1——シュミットとモルトマン

## (1) C・シュミット

- ・固有な意味における政治とは：主権・例外、友敵
- ・政治と宗教との関連における政治神学

## 1. 『政治神学』未来社。

「主権者とは、例外状況にかんして決定をくださる者をいう」(11)

「例外は通常の事例より興味深い」(23)、「その例外が説明できなければ、一般もまた説明できない」(24)

「現代国家理論の重要概念は、すべて世俗化された神学概念である。たとえば、全能なる神が万能の立法者に転化したように、諸概念が神学から国家理論に導入されたという歴史的展開によってばかりでなく、その体系的構成からもそうなのであり」、「例外状況は、法律学にとって、神学にとっての奇蹟と類似の意味をもつ。」(49)

## 2. 『政治的なものの概念』

「国家という概念は、政治的なものという概念を前提にしている」(3)

「特殊政治的な区別とは、友と敵という区別である」(15)

「敵とは、競争相手とか相手一般ではない。また反感をいだき、にくんでいる私的な相手でもない」(18)、「現実的可能性として、抗争している人間の総体」「公的な敵」(19)

「戦争は決して、政治の目標・目的ではなく、ましてその内容ではないが、ただ戦争は、現実的可能性としてつねに存在する前提なのであって、この前提が、人間の行動・思考を独時なし方で規定し、そのことを通じて、とくに政治的な態度を生み出すのである」(27)

「宗教的、道徳的その他の諸対立が、政治的対立に高まりうるものであること」(31)、「政治的対立に転化してしまう」(33)

「重大事態をふまえての結束だけが、政治的なのである」、「決定の単位」「主権をもつ単位」(36)

## (2) J・モルトマン「政治的宗教の神学的批判」

- ・現代の課題としての神学的課題としての政治
- ・三位一体論の政治神学的意義の回復、シュミットとペーターゾン

「政治的の神学とは、近代においてキリスト教神学が自覚的に遂行されてゆかなくてはならない分野、状況、場所、舞台をあらわしている。政治的の神学は、すべてのキリスト教神学に政治的の自覚を呼び覚まそうと意図している」(25)

「社会批判的の神学が、教会的・社会的の現実に直面して自己批判的に、自己本来のキリスト教的要求から始めるというのは全く意味深い解釈といえる。批判的の神学は教会

の源泉、中心からくるのである」(28)、「終末論的約束の担い手の十字架刑という神学的-政治的出来事が立っているのである」(29)

「既存のローマの国家宗教を「キリスト教化」したが、しかしそのさい反面、自らを「宗教化」した。つまり現存の国家理由の意味で「政治化」した」(33)

「万有はひとつの専制主義的構想をもつ。ひとりの神——一つの世界。このように神は、現実全体の統一性へ結びつけられ、この統一性の象徴ないし統合点とされる。自然的神学におけるこのような唯一神論的世界理解に対し、政治的神学におけるひとり皇帝の帝国主義が対応している」(36)

「三位一体論の形成とともに、キリスト教神学は宗教-政治的唯神論から自由になった。直ちに事実においてそうならなかった場合でも、原則的にそれを打ち破った。私の考えでは、今日にいたるも政治的宗教に対する批判は三位一体論の政治的効能である」(38)

「三位一体論を自由に放棄してゆくことは、キリスト教信仰がキリスト教世界の政治的宗教に自覚的に融解してつくことのあるしである」(38)

### 3. 解放の神学 1 —— フェミニスト神学 1

#### (1) フェミニスト神学の誕生

1. ユング：三位一体の象徴（キリスト教に規定された西洋文化圏における完全な自己の象徴）は完全(vollkommen)であるが、十全(vollständig)ではない。

(ユング「三位一体の教義にたいする心理学的解釈の試み」(1948) (林道義訳『心理学と宗教』人文書院、1989)。

↓

三位一体の象徴はそれ自体としては、完結したまとまりを有しており、完全な自己の象徴として機能しうるものであるが、そこには欠けているものがある。西洋文化の根本的な問題。女性原理あるいは身体原理の排除（キリスト教の三一神論は古代の女神の要素を排除することによって形成された）。

↓

女性や身体の理解のゆがみ、悪の問題におけるアポリア

2. 1960年代以前のフェミニズムが主として男性中心の社会システムにおける女性の権利獲得を目指していたのに対して、この30年間のフェミニズムは社会システム全般に対する異議の申し立てを超えて、それを支え正当化している価値観や世界像の批判へと進み、文化や意識のレベルでの変革を追求するに至っている(大越, 1997)。

①キリスト教が直接的あるいは間接的に女性に対する不当な暴力に荷担し、それを正当化してきた点について。例えば、魔女裁判の場合。

②キリスト教が男性優位の価値観を制度化し、構造的に女性の権利を抑圧してきた点について。女性の聖職者への叙階に関する制限など。但しこの制度化は意識的になされている場合だけでなく、無意識あるいは自動的に行われているものに注目する必要がある。

③男性中心の価値観の枠内における理想の女性像を女性に押しつけてきた点について。自己犠牲的愛、謙虚さ、従順などを女性の美德として奨励し——イエスの十字架はこうした理想的女性の規範として使用される——、大胆に自己を主張し権利を求める女性を自己矛盾に陥らせる(つまり、自己規制を要求する)、あるいはこうした女性に対する他の女性の反発や攻撃を助長する。

④女性は自らの宗教経験を表現するにも男性中心の言語を用いざるを得ない。女性は自らの言語すら奪われている。

3. フェミニズムの問題提起 → フェミニスト神学

フェミニズムの問題意識を共有しつつ、新しいキリスト教の形成を目指す神学運動として展開されている。そこには、キリスト教の徹底的な否定論から伝統の再生論まで多様な議論が交錯している。

## 4. 争点としての聖書解釈の問題（フェミニスト的聖書解釈）

「この探求の出発点は、共観福音書のイエスとの出会い、つまり彼について蓄積された教義ではなく、彼のメッセージと実践でなければならない。」（Ruether, 1983,p.135）

日本におけるフェミニスト神学も、この聖書解釈という場を中心に展開してきた。

絹川久子『聖書のフェミニズム 女性の自立をめざして』ヨルダン社、『ジェンダーの視点で読む聖書』日本キリスト教団出版局。

フィリス・トリプル『フェミニスト視点による聖書読解入門』新教出版社。

## 5. 対照的で代表的な論者として次の二人に注目

デイリ（Mary Daly, 1928-2010）とリューサー（Rosemary Radford Ruether, 1936-）

アメリカ、白人、リベラルなキリスト教という文脈、そしてこの文脈を超えた展開。

## （2）デイリとリューサー

## 6. 神が男性イメージ（家父長的で王権的）によってのみ語られている点に関して。

デイリ（Daly, 1973）は、イエスは男性であり、それゆえ女性の生き方の規範になり得ないと主張する — イエスは過去の人物であり、現代人の規範にはなり得ない、そもそも人間は自分自身の人生を生きねばならないのであって、他人を規範とすることはできない —。

## 7. 真の人間、規範的人間としてのイエスの否定であり、イエスの神性の否定をさらに超えた徹底的なキリスト教批判。

「イエスの十字架に集約された神の謙卑（ケノーシス）＝人間の、とりわけ女性の美德としての自己否定、自己犠牲の模範」。これによって、女性の抑圧メカニズムを強化し、女性が自らの置かれた抑圧状況を不当なものとして意識化することをも困難にする。

十字架は父権的宗教が女神を殺害し女性に対する暴力を内面化するところに成立した象徴であって、そこにつるされたのは実はイエスではなく、女神だった。

## 8. リューサー：デイリの伝統的キリスト論の徹底的な否定論に対して、フェミニスト神学に至る思想系譜をキリスト教思想の伝統自体の中に再発見し、その過程でキリスト論の再構築を試みている。

## 9. リューサー（Ruether, 1983, 116-138）。古典的キリスト論（カルケドン公会議の）は、贖われたメシア的王の思想と神と人間を結びつける神的知恵の思想とを基盤に成立したが、その際に男性象徴（男性としてのイエス）が選ばれた。

↓

イエスという歴史的人物が男性であったことと、神の子あるいはロゴスが男性であることとの間に必然的かつ存在論的な関係があるという考えが派生

↓

女性原理が神象徴の中から排除される。

## 10. イエスの宗教運動から家父長的なキリスト論（正統キリスト論）の成立という400年以上のわたる歴史的なプロセス（キリスト論の家父長化）は、イエスの宗教運動からの変質であり、それは、他のキリスト論の諸様態の排除によって可能となった。

## 11. イエスの宗教運動に内包されたフェミニスト的キリスト論（女性の経験と関連しうるキリスト論）。

フェミニスト神学の聖書解釈は、まずイエスの宗教運動の中に男性優位イデオロギーとは異質な主張を再発見し、続いて正統キリスト論によって抑圧されてはいるが様々な仕方生き続けてきた他のキリスト論を掘り起こす作業を行う。

↓

イエスの宣教した神の国は国家主義的でも彼岸的でもない。神の国は支配と被支配、抑圧と服従の構造を乗り越えるものとしてこの地上に到来する。イエスはメシア的預言者を王的にではなく、僕として象徴化する。イエスは当時のユダヤ社会において制度化されていた様々な差別抑圧構造と戦わざるを得なかった。

## 12. 正典化のプロセス

多様な可能性の中より家父長的なキリスト論が正統キリスト論として公認され、それに伴って他のキリスト論の可能性は聖書テキストから排除され隠蔽される。

「キリスト教徒であるローマ皇帝は、キリスト教会と共に政治世界を支配する。主人は奴隷を、男は女を支配する。女性、奴隷、野蛮人は非ロゴス的で、精神のない者であり、神のロゴスの代理人によって支配され、規定されねばならない。キリストは、新しい世界秩序の全体的支配者となった。」(ibid.,125)

## 13. リューサーが注目するのは、神秘主義の伝統に見出される両性具有的キリスト論と、預言者的千年王国論的運動に見られる霊的キリスト論。

・イエスに女性的あるいは母的な属性を与える両性具有的キリスト論。その背後には、両性具有人の神話が潜んでおり、グノーシス主義のキリスト論から中世の女性神秘主義者(ノーリジのジュリアンなど)のキリスト理解を経て、近代のペーメヤスヴェーデンボルグの神秘主義、そしてロマン主義に影響。

・モンタノス運動から中世のフィオーレのヨアキムの影響を受けた諸セクト(14世紀のペギン会系のセクトなど)や18世紀のシェーカーの運動に至る預言者的運動においては、霊的キリスト論が展開されてきた。

「この種の霊的キリスト論は、過去の全くの歴史的なキリストと今も臨在する霊を区別しない。むしろキリストを、今現在、人間——男も女も——の中に顕わにされ続ける力とみなす」(ibid.,131)。

↓

## 14. 「支配—従属」のモデルに規定されないキリスト論(フェミニスト的キリスト論)の再構築。

「解放者として語るイエスの能力は、男であることに存するのではなく、この支配の制度を批判し、彼自身の人格の中に、奉仕と互いの法的権限を認め合う新しい人間性を具現しようとした、その事実に存するのである。……神学的に言って、イエスが男であることは、究極的な重要性を持たないと言えるかもしれない。それは、家父長的特権を認める枠組みの中で、社会的象徴的意味を持つだけである。この意味で、解放された人間の代表であり、解放を促す神の言葉であるキリストとしてのイエスは、家父長制のケノーシスと新しい人間性の宣言を顕わにする。この新しい人間性は、ヒエラルキーに基づく社会的地位の特権を捨て、低き者のために語る生き方を通して宣言されるのである。」(ibid.,137)

## 15. デイリ：男性と女性の非和協的な敵対関係を前提とした「女性解放論」

リューサー：「女と男からなる新しい人間性」の実現という意味における「人間解放の神学」

## <参考文献>

1. 大越愛子『フェミニズム入門』ちくま新書、『女性と宗教』岩波書店。
2. 日本フェミニスト神学・宣教センター：  
<http://cftmj.cocolog-nifty.com/blog/cat2537789/index.html>
3. Susan Frank Parsons(ed.), *The Cambridge Companion to Feminist Theology*, Cambridge University Press, 2002.
4. Mary Daly, *The Church and the Second Sex*, Beacon Press, 1968(1985).  
(『教会と第二の性』未来社)  
*In Beyond God the Father. Toward a Philosophy of Woman's Liberation*, Beacon Press, 1973.
5. Rosemary Radford Ruether, *Sexism and God-Talk. Toward a Feminist Theology*, SCM Press,1983. (リューサー『性差別と神の語りかけ フェミニスト神学の試み』新教出版社。)  
リューサー『人間解放の神学』新教出版社。
6. 熊澤義宣・野呂芳男 編『総説 現代神学』日本基督教団出版局。